

令和6年度 東京都立農芸高等学校(全日制) 学校経営報告

校長 吉野 剛文

今年度は、農芸祭や体育祭はコロナ禍前に戻して実施した。本校は、健康な民主社会の担い手の育成を目指し、全教職員による組織的取組を推進してきた。今年度の結果を検証し、次年度へ反映させ学校全体で取り組んでいく。

1 今年度の取組と自己評価		
(1) 教育活動への取組と自己評価		
各学科の教育活動		
① 大学 科共 通	(ア)	授業規律を重点的に定め、教職員が共通認識をもって指導にあたるように努めた。学級担任と教科担当が連携を一層充実させ、生徒一人一人の学習指導に取り組んだ。
	(イ)	各教科は、教科主任を中心に「学力スタンダード」に基づいて、生徒の基礎学力の定着と伸長を図るとともに、学力の向上に取り組んだ。
	(ウ)	基礎・基本の学力を確かなものにするため、1年次には中学校段階の再学習を実施した。特に、国語・数学・英語を中心に小テストを繰り返し、また補習・補講を実施した。また全学年かつ全教科で、高校の学習に遅れがちな生徒に対して、補習・補講・レポート提出などに取り組んだ。さらに1学年は、普通教科を中心に校内寺子屋事業（学力向上）及び長期休業中の特別講習に取り組んだ。
	(エ)	教職員は、学習指導力向上のために研究と修養に努め、授業力の質的向上に取り組んだ。そのために「教員相互の授業参観」を実施するとともに、研究授業や他校での授業参観を通して実力を高めた。さらに、教科担当者は、ICT機器で使用する教材開発を積極的に行った。
	(オ)	「国語」「英語」「数学」での習熟度別授業、「体育」や「家庭」等の少人数制授業を有効に活用し、生徒の実態に即した授業を展開した。 国語科では、漢字検定を校内で実施し、2級2名、準2級4名、3級28名が合格した。 英語科では、英語実用検定を校内で実施し、準2級が2名合格した。
	(カ)	特別な支援が必要な生徒対応については、特別支援委員会を開き組織的に生徒情報を共有した。また、スクールカウンセラーと連携するとともに、コミュニケーションアシスト講座や心理士を活用するなどして指導した。
	(キ)	自宅学習の備えとして、オンラインでの授業を念頭に置いた教材作成に教科で取り組んだ。また、12月12日には、オンラインデーを設定して自宅での学習を実施した。
農業科の取組		
② 園芸 科学科	(ア) 学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組	(学習指導) 授業・レポートの指導等をとおして基礎学力の定着を徹底した。Microsoft Teamsでも活用可能な授業展開、教材の更新を行い、学習意欲を維持できるように取り組んだ。感染対策として教室や更衣室の使用法や実習内容を工夫した。 (生活指導) 全ての授業で、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。また、食料や生活を育む植物を扱う者として自他の生命を尊重し、自然に感謝と愛する豊かな心の育成につなげることができた。 (進路指導) 専門教育やインターンシップをとおして、自己の在り方や生き方を考えさせ望ましい勤労観と職業観を育てた。また、学科の教職員における面接指導及び小論文指導を丁寧に行い、組織的な進路指導を実施した。 (地域連携) 地域企業と連携の取組として、これからの農業の在り方や企業が取り組む農業事業について指導・助言を行った。また、農芸高校と連携できる事業について協議した。 (特色化) GAP教育の推進に努めた。5月にはJGAP認証継続審査を実施した。また、農業アプリを活用した栽培記録を行い、スマート農業を実践した。 (資格取得) 校外学習・資格取得やインターンシップを勧め、農業関連分野への意欲・関心を高めた。また、進路指導部や学年と連携して3年生の進路活動を支援した。
	(イ) 目標達成のための実践結果	(A) 基礎学力向上を目標として、各科目で言語能力と計算能力を高める授業展開を実践した。また実験や実習を重んじ、科学的な思考や倫理観を高めることを目指した。特にレポート指導を強化することにより、論理的な文章が書けるように指導を行った。 (B) 座学や実習等を通して、自然と人間生活の関わりを深く理解する機会を積極的に設け、農場及び実験・実習施設の清掃指導を徹底し、清潔で安らぎのある学習環境と生活環境を整えた。 (C) 3年生の進路指導は科内で分担して個別に面接・論文指導を実施した。3年生は「都庁花壇の装飾」を実施し、2年生は「阿佐ヶ谷花壇の装飾」を通して、奉仕の心の育成と社会に尽くす態度を育むことができた。 (D) 3年選択「野菜」の授業では、トマト・ミニトマトを栽培し、GAP教育に取り組んだ。次年度は全生徒への浸透のために取組みの改善が必要である。 (E) 農業技術検定3級35名が取得した。初級バイオ技術者認定3級9名が取得した。
	(ア) 学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組	(学習指導) 座学では意義や役割と理論を学び、実習では総合的な体験及び検証を行い、食品に関する基礎的・基本的知識と技術を習得の向上につなげた。 (生活指導) 豊かな人間性育成のため、実験実習を通して基本的な生活習慣の確立を図った。また、すべての授業において、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。 (進路指導) 学科の教職員における面接指導、小論文指導を丁寧に行い組織的な進路指導を実施した。
③ 食品 科学科	(ア) 学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組	(学習指導) 座学では意義や役割と理論を学び、実習では総合的な体験及び検証を行い、食品に関する基礎的・基本的知識と技術を習得の向上につなげた。 (生活指導) 豊かな人間性育成のため、実験実習を通して基本的な生活習慣の確立を図った。また、すべての授業において、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。 (進路指導) 学科の教職員における面接指導、小論文指導を丁寧に行い組織的な進路指導を実施した。

④緑地環境科	(地域連携) 地域におけるマルシェ販売では、「ジャム」・「クッキー」・「パウンドケーキ」を販売した。 (特色化) 多岐にわたる製造項目を実習授業において学習し、専門性を生かした地域の特産品の開発に取り組み、専門教育の向上と充実を図った。 (資格取得) 将来役に立つ食品に関する資格取得を目的とした授業をカリキュラムに取り入れ、受験者の8割が合格できるよう指導を行った。	
	(イ) 目標達成のための実践結果	
	(A) 実験実習を通して専門的知識と先端技術への理解を深めさせた。学習では、内容を常に記録と整理を行い、活用する習慣を身に付けさせた。また、レポート等の提出期限を守るよう指導の徹底を図った。 (B) 実験・実習の授業を通して、安全に配慮し、協力と責任を重んずる態度とそれを実践する力を養った。また、生活規律の指導として欠席、遅刻、早退、忘れ物等の指導を徹底した。特に、食品衛生に留意し、服装、頭髪、化粧、爪、装飾品、手洗いなどの管理を徹底した。 (C) 実践的な学習活動とし、専門学校講師による、和菓子（製餡実演、練切）、カラーコーディネーターや包装技術の有資格者による授業等を実施し、食品のスペシャリストとしての職業観を養うことができた。 (D) 地域を対象とした公開講座を予定したが、受講者が少なく中止となった。 (E) 食生活アドバイザー検定3級・P検3級、リテールマーケティング検定3級を希望者に受検させた。日本農業技術検定において2級は、2・3年生8名が受験して5名（合格率62.5%）が合格し、優秀団体として表彰された。また、3級は2年生60名が第1回（7月）に受験し、88.3%合格した。1年生は、今年度から全員が第2回（12月）3級を受検し、43.5%が合格した。今後は合格率を上げるために、2年生の7月に全員が受験する指導を行っていく。食生活アドバイザー2級は7名、3級は19名、食品衛生責任者は19名、新たに校内で受験可能となったリテールマーケティング検定3級は2名の合格者を出した。初級バイオ技術者認定試験（3年生）では、6名が合格（合格率86%）であった。	
	(ア) 学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組	
	(学習指導) 専門教科で丁寧なレポート添削を行い、文章力や表現力を向上につなげた。少人数での技術指導やグループ活動、実技試験などを積極的に取り入れ生徒の技術向上につなげることができた。 (生活指導) すべての授業において、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみ、の指導を徹底した。特に、実習における保護帽子や保護手袋の着用を徹底し、安全な実習を行った。 (進路指導) 学科の教職員における面接指導、小論文指導を丁寧に言い組織的な進路指導を行った。また、学科として、インターンシップを推奨した。 (地域連携) 地域と連携した活動として、公開講座や門松の製作を行い本校の正門に設置することで、日本の文化と技術力の発信を行った。また、教育庁にも持参することで、緑地環境科の評価につながった。 (特色化) 地域や産業の発展に貢献できる課題研究を実践することができた。卒業庭園は、建設業協会のパネル出展作品で建設業協会長賞を受賞した。 (資格取得) 造園技能士検定3級では、合格率80%以上を目指し指導を行った。造園技能士検定2級は合格率50%以上を目指し指導した。その他にも農業技術検定や刈払機の資格取得、レタリング検定、トレース検定など様々な資格取得の機会を作ることができた。	
	(イ) 目標達成のための実践結果	
	(A) 項目ごとにレポートを課し、丁寧な添削で生徒の課題把握や技術習得につなげた。測量実技テスト、根巻き実技テスト、ロープワーク実技テストなどを実施し、生徒の技術習得につながった。また、選択科目である造園CADの科目においては、きめ細やかな指導を実践し、コンテストにおいて最優秀賞1名、優秀賞1名を輩出した。実習をとおして責任感や人と協力し合う態度を、身に付けさせることができた。その結果、限られた時間の中で生徒が自己の役割を認識し、自信をもって活躍できる教育活動を実践することができた。 (B) 昨年度の反省を生かし、講座内容を見直すことで公開講座を実施し、参加者から高評価を得た。三谷小学校との学校間協力、地域行事など、緑地環境科だからできる貢献活動を実施した。 (C) 技能スタンダードの実施に基づき、在学中に日本農業技術検定を全員受験させ、今年度は3級18名（18/25名）が合格した。トレース検定（30/34名）、刈払機（18名）、さらに造園技能士検定に取り組み、2学年・3級（20/25名）、3学年・2級（4/8名）の合格となった。 (D) 造園の全国大会であるものづくり競技会に、本校から初めて出場することができた。また、農業クラブ全国大会では農業鑑定競技造園の部において優秀賞を得た。建設業協会への出展においては卒業庭園制作をパネル化し、全部門でのトップにあたる建設業協会長賞を受賞した。	
	2 今年度の取組について	
	(1) 教育活動の具体的内容と結果	
	①学習指導	(ア) 学力スタンダード
学力		学力向上は、学校全体の取り組みとして「学力スタンダード」に基づき、各教科にて実施した。身に付けるべき知識・技術を学力スタンダードに基づき指導した。特に、希望進路の実現に向けた学力を高めるため、日課表に朝学習10分間が盛り込まれているが、実施学年と学科においては取り組みの状況に温度差があった。今後は、基礎基本の知識習得に向けた指導の改善を図る必要がある。
	技能	農業の専門教科については、「技能スタンダード」に基づき学科を中心に各教科の中で、知識・技能の習得を図り資格取得に力を入れた。特に2学年全員受験の「日本農業技術検定3級」は、目標合格률을85%としていたが、83%の合格率に留まった。次年度へ向け、指導の改善が必要である。

	改善	生徒による授業評価アンケートを2回実施し、その結果を生かして、分かりやすい授業をするための工夫を行うなど、各学科間において学力及び専門科目に関する知識や技術の向上に向けた検討を行った。
	(イ) 観点別学習評価	
	新学習指導要領に基づく教育課程の導入に伴い、観点別学習評価について検討会を実施した。従来からの評価の材料では評価しきれない面があることから、授業展開や新たな教材等の開発を含めて次年度の改善が必要である。	
	(ウ) アクティブラーニング	
	『対話的な学びを通じて「わかる」から「できる」』授業を目指して取り組んだ。多くの授業でアクティブラーニング型の授業を実践した。	
	(エ) 言語能力の充実	
	今年度も言語能力の充実のため、各教科の授業の他に授業以外の活動においても取り組んだ。文章を書かせる取り組みについてはコンクール出品等を機会として継続した。	
	専門科目においても科目「課題研究」の発表会を中心として、他者に分かりやすいプレゼンテーションの作り方と発表方法について身に付けさせることができた。また、各科の工夫により保護者が参観できる体制づくりを行った。	
	(オ) 基礎学力の充実	
	進路指導では、民間OB活用事業の一部で小論文指導として放課後を中心に数多く実施した。また、国語科と連携を図り、小論文講習を都度実施した。	
	各専門学科では、放課後や長期休業中に実習レポートのきめ細かな指導に取り組んだ。また、学力向上研究校として、オープンスペースに配置した机と椅子を活用し、放課後の個別指導や長期休業中の補講を行った。さらに、基礎学力の伸長を図るため、夏季休業中には寺子屋事業も実施した。	
	1学年は、寺子屋事業の活用により夏季休業中を中心に大学生による指導を展開した。担任や進路指導部による働きかけにより一定の定着が進み学力が向上した。	
	家庭学習の習慣を付ける取り組みは、学年及びクラスにより温度差がある。今年度の1学年は、スタディサプリの導入と活用により改善したが、生徒の実態や授業内容とスタディサプリの内容に乖離が見られる単元もあることから、次年度は学校全体で組織的な取り組みを実施する。	
	(カ) 資格取得の奨励	
	一人一検定を目標に、資格検定へ向けた指導を展開することにより専門学習の深化と興味関心の高まりが見られた。従来の漢字検定、英語検定、パソコン検定に加え、専門分野のFFJ検定、農業技術検定、造園技能検定、トレース、レタリング、食生活アドバイザー、食品衛生責任者など、専門分野に関係する資格試験を学年別の全員受検・参加や希望者受検で行い、今年度は延べ291名が合格した。特に、生徒に学習への興味関心を高めさせるために、コンクールや競技会等に外部の教育力を活用し積極的にエントリーをした。挑戦した生徒は、学習への更なる意欲をもち主体的に学習に取り組んでいる。	
	①造園技能士検定 3級：2学年（20名）、2級：3学年（4名） ②日本農業技術検定 2級（5名）、3級（133名）など	
	(キ) GAP、HACCPなどの認証制度への取組	
	GAP認証について学習を進めた。GAPで求められる農業生産工程の見直しについて整備した。今年度は、教員対象のGAP校内研修を実施した。また、HACCPの基準による工程の見直しを行った。	
	(ク) 授業外の学習（補習・講習、プロジェクト・家庭学習）	
	アグリマイスター頭彰制度や農業技術検定2・3級などの資格取得を目指して、授業や放課後に指導を実施した。	
	(ケ) SDGsの視点を取り入れた授業の実施	
	各教科は、SDGs17項目持続可能な開発目標を選択して、各学期1回以上の授業を目標とした。次年度以降も継続して取り組む。実施後には、実施一覧表への入力も行った。	
②生活指導	今年度は、登校時の挨拶指導と自転車通学のヘルメット指導を実施した。下校時のヘルメット着用率が低いのが課題である。また、今年度からの指導となるため2・3年生の着用義務の理解に苦慮した。生活指導部担当の共通理解の下、年間を通して継続的に熱心に指導している。しかし、登下校のマナーや身だしなみなど、今後も取り組むべき課題がある。	
	(ア) 頭髪指導	
	頭髪については大多数の生徒が守ることができている。保護者、生徒、教員の共通認識のもとに指導に取り組み、進路指導とも結び付けた取り組みにより、一定の成果は得られたものと考えられる。ただし、生活指導部と学年指導の連携と理解、計画については課題も見られた。また、一般的には、学年進行ごとに染色する生徒が多くなる傾向と言われるが、本校ではその傾向が少ない。	
	(イ) 遅刻指導	
	遅刻指導は、「登校確認票」を提出させているが、上級学年の取り組まずに把握できないことが課題である。特定の生徒の遅刻が多くなる傾向にあり、背景は個々により様々である。体調不良によるものや家庭環境によるもの等、理由は多岐にわたる。引き続き、遅刻連絡の徹底、遅刻指導の形式化を次年度の課題として組織的に取り組む必要がある。	
	(ウ) 服装指導・その他（指定ボロシャツの導入）	
	毎学期、考査ごとに服装指導を行い指導している。対象となる生徒は、同じ生徒が多く、上級生の影響も少なくはない。学校全体として指導することだが、学年と生活指導部が中心となる職員の体制の課題もある。次年度に向けた学校指定のボロシャツ導入を決定した。	

③ 進 路 指 導	(エ) 授業規律 全体的に授業内の規律は保たれている。今年度は校内巡回を廃止した。生活指導部では空き時間に校内を巡回した。1学年の中では、授業規律の乱れや中抜けがあり都度対応したが、職員室の人出不足により対応に苦慮した。精神的に幼い生徒が多く、教科指導力が問われる傾向である。
	(オ) 規範意識 日常の礼節指導はもとより、集会時の話を聞く姿勢の改善に向け指導をしているが一部に私語など落ち着かない状況がある。今後さらに、きめ細かな指導を通じ状況に応じた立ち居振る舞いができる姿勢を養う必要がある。
	(カ) 自他の生命・人権尊重の精神（他者を尊重し、思いやりの心を大切に）に向けた指導 薬物乱用防止教室やセーフティ教室を通して、自他の生命や人権を尊重する指導を推進した。いじめ対策として、年3回のアンケート調査を行い生徒把握に努めた。5月と翌年の1月に全学年は、パワーポイントを活用した「いじめ未然防止学習会」を実施した。またスクールカウンセラーを活用し早期発見に努め、生徒の悩みに対応することでいじめ防止を図った。いじめが発生した場合は、生活指導部、いじめ対策委員会が連携して取り組む。 安全教育、特に交通安全教育を充実させ、登下校時のマナーと自転車事故防止の徹底を図った。特に、スクールカウンセラーを活用した教育相談委員会を活性化させ、特別支援教育の必要な生徒の情報を教員間で共有して指導に役立てた。また、特別支援委員会等を活用し生徒の支援を充実させ、いじめ防止の取り組みや自殺防止対策に資する教育の推進を図った。次年度は特別支援委員会の組織を改善して、より効率的に指導できる体制を整える。
	令和6年度の進路決定率は、85%であり卒業時の進路未定は生徒17名となった。幹旋就職第一希望の生徒16名のうち16名が内定をした。進学実績は下記のように例年以上の良い結果となった。専門を生かした就職は67.5%。進学は71.3%と例年並みの実績で、本校の教育活動の成果が表れている。
	(ア) 進学（大学、短大、専門学校） 大学・短大進学者はR5年度の46名からR6年度は48名と9%増加し、専門学校進学者はR5年度33名からR6年度40名と増加した。大学校（R5年度2名、R6年度4名）を含めた進学者数は、R5年度91名（全卒業生の71%）、R6年度88名（同72%）でほぼ変わらない。大学進学者の内訳は、農業系大学（R5年度30名→R6年度33名）、大学・短大（R5年度46名→R6年度48名）である。大学短大進学者増の背景には、大学短大進学希望者増の影響が大きい。主な農業系大学進学先は東京農業大学（17名）、日本獣医生命科学大学（3名）、酪農学園大学（1名）、東京聖栄大学（2名）などである。主な大学短大は十文字学園女子、女子栄養大学、東京医療保健大学などである。また一般大学進学者や一般受験希望者は昨年通りだが、都立看護専門学校（1名）には、平成30年度も一般受験での合格者が出ており、今年度は日本赤十字看護大学に1名、東京農業大学に2名合格している。一般受験への取り組みは、低学年からの意識付け、学年、進路部、学科が連携した指導と民間OB等活用事業及び学力向上研究校を生かした取り組みの成果と言える。特に3学年は、推薦入試のための面接指導・小論文指導に力を入れた。夏季休業中には特別講習として、外部指導員や教員の面接指導や志望理由書の書き方講座を開催し、延べ77名の生徒が参加した。今後は、大学進学希望者の増加に対応した取り組みとして、基礎学力向上のための講習や資格取得、専門教科学習の充実と併せて、3年間を見通した進路プランに従ってキャリア教育の充実を図っていく必要がある。
	(イ) 就職 3年就職希望者に対しては、進路指導部が中心となって、面接、作文指導や礼節指導等を実施。挨拶や敬語、身だしなみの習慣は全校で指導に取り組んだ。また、夏季休業直前に労働局キャリア支援講座を受講させて就職準備を進めた。1回目の採用試験で合格した生徒が67%で、R5年度の96%を下回った。就職希望者はR3年度33名→R4年度31名→R5年度25名と減少が続いている。R6年度は幹旋就職希望者が11名（縁故等を含めると14名）と減少傾向はさらに強まった。R6年度は公務員希望者が2名いたが、1名は国家公務員に合格した。引き続き生徒の進路選択の幅を広げるためにも1年次より継続的に勉強に取り組ませていく環境づくりが必要である。
	(ウ) 3年間を見通した計画的なキャリア教育 3年間を見通した進路指導のロードマップを活用し、微調整を図りながら進路指導を行った。また、あらゆる教育活動においてキャリア教育を推進し、自己の在り方生き方を考えさせ、望ましい勤労観・職業観を育み主体的な進路選択を行える生徒の育成に役立てた。特に、学年ごとに卒業後の進路を見据えたガイダンスや長期休業中における見学課題等を通じ自己の進路について考えさせる指導を実施した。今後も進路指導部と学年が連携を図り、すべての生徒の希望する進路の実現を目指す。また、農業各学科では、学年に応じた産業現場見学を設定し農業及び農業関連産業への興味関心をもたせる学習活動を実践した。
	(エ) その他 進学では、本校生徒ではやや難しいと考えられる学校や学部、就職では自分の希望する分野を堅持し挑戦する生徒が多くいた。また、そのために努力する姿勢も見られた。これらの生徒の希望を叶えることが真の意味での進路実現である。受験指導、就職指導をより計画的に行うことは進路指導部の責務であると同時に、学年、教科との連携を強くもたなくては実現できない。1・2学年は、R5年度より導入したスタディサプリを活用している。今後も組織的、具体的に進路実現を図れる環境をさらに醸成していく。
	(オ) 点検機能の充実 調査書や推薦書は、組織的な点検機能（学年⇒進路指導部⇒管理職）を充実させ、進路に関する関係書類等の転記ミスを0とすることができた。次年度は、調査書の点検確認として教務部も行う必要がある。
	(ア) 日本学校農業クラブ活動

特別活動・部活動	日本学校農業クラブ活動等への積極的な参加をととして、学習活動に意欲をもたせた。また、今年度も可能な限りにおいて地域貢献交流会・生産品販売、「交通会館マルシェ」「杉並マルシェ」などに参加し実績を上げた。
	農業クラブ活動においては、東京都予選会ではプロジェクト発表「分野Ⅰ類」で園芸科学科から2名、食品科学科から1名が優秀賞を受賞した。また、意見発表会には各分野から1名ずつが参加した。さらに、家畜審査競技会と平板測量競技会にはそれぞれ4名が参加した。
	第75回日本学校農業クラブ全国大会令和6年度岩手大会では、農業鑑定競技会において園芸科学科の「野菜」分野で1名、緑地環境科の「造園」分野で1名、食品科学科の「食品」分野で1名が優秀賞を受賞した。来年度以降も積極的に取り組み、諸活動をさらに活発にしていける必要がある。
	(イ) 馬術部全国大会
	引き続き、校内体制及び組織的な運営の取り組みが課題である。
	(ウ) 部活動の充実、競技力の向上
⑤ 募集・広報	生徒昇降口に部活動掲示板で、大会情報を積極的に伝えることにより、達成感と成就感の感じられる活動につなげた。その都度、ホームページやX、Instagramなどを活用して部活動の様子を掲載した。
	(ア) 日常の情報発信・学校ホームページ、X、Instagramの活用
	受検者確保のため、学校見学会（3回）、体験入学（2回）、学校説明会（4回）、個別相談（3回）を行った。また、近隣の区（杉並区、中野区）の進路説明会、11月の新宿高校を会場とした都立高校合同説明会に参加した。授業紹介の動画発信、ホームページとX、Instagramによる情報発信に努めた。
	(イ) 学校パンフレットの全面リニューアル・横断幕の作成
	6月に、全学科・全項目の写真及び内容等を見直して完成させた。また、学校オリジナルのクリアファイルを作成して中学生に配布した。さらに、横断幕を2枚作成して生徒の帰属意識を醸成するとともに、活力ある学校としての情報発信に努めた。※①農芸マルシェ、②みんな集まれ 農業しようよ。
	(ウ) 美化活動、掲示活動を充実
⑥ 健康促進	一斉清掃の実施により学習環境の整備や保全を心がけた美化活動をととして、生徒の豊かな心を涵養した。次年度は日々の清掃活動の取り組みに向けて動き始める必要がある。
	(ア) 新たな日常における感染症対策
	感染症対策としては、引き続きコンデションレポートの活用、十分な換気の実施と加湿器の設置を適切に行い、生徒が安心して登校できるように心がけた。
	(イ) 合理的配慮の把握と支援方法の工夫
	特別支援委員会（スクールカウンセラー含む）を通じて支援を必要とする生徒の情報を共有し、生徒が安心して学校生活を過ごせるよう毎週委員会を開催した。特に発達障害に係わる内容だけではなく、児童虐待等の疑われる生徒や福祉の関わりが必要な生徒について、子供家庭支援センター、児童相談所等と連携した。また保健部が中心となり校内研修及び専門医派遣事業を活用して事例研究会を実施した。特に、指導上共通理解が必要な対応方法について、専門医（精神科）より医療的な観点からの助言をいただいた。スクールカウンセラーを積極的に活用することで、多様な生徒の「心と体」の悩みに対して迅速に対応し、校内の教育相談体制を活性化した。その一つとして、6月より保健室は、全日制・定時制の合同使用に変更した。定時制課程で使用していた保健室を相談室（カウンセリング室）として使用用途を変更し環境を整えた。
	(ウ) 保健だよりからの情報発信
	カウンセラーとの連携をより一層緊密にすることで、生徒へのきめ細かな対応を心がけた。さらに、「ほけんだより」を全生徒に概ね毎月配布して健康推進に努めた。
	(エ) いじめの未然防止指導
	学校はいじめや体罰を許さないという姿勢を明確に示し、生活指導部によるいじめに関する講話を5月に実施するとともに、いじめアンケートを年3回実施した。項目の「ある」に○を付けた生徒からは、担任や生活指導部及び管理職が丁寧に話を聞き対応した。また、必要に応じていじめ対策委員会を開催した。
⑦ 学校経営	(オ) 清掃用具等の整備、清掃指導、美化活動
	「環境教育実践宣言校」として、省エネ、ゴミ減量等について生徒・教職員ともに高い意識をもって実践した。ゴミ集積場の管理も徹底されており、生徒が協力して分別・コンパクト化に取り組んでいる。粗大ゴミの処分が滞る傾向にあり、今後、計画的な処理が必要である。
	(ア) OJT、自己研鑽、PTA・校友会との連携強化
	学校は情報発信を積極的に行い、PTAや校友会と緊密に連携することにより教育活動をより一層充実させた。また、学校運営連絡協議会が実施する学校評価アンケート及び生徒の授業評価アンケート、さらに保護者意見の結果から分析や検討を継続的に行い、意見や提言を真摯に受け止め学校経営に反映させた。
	(イ) 経営企画室・教員の連携、計画・効率的な予算執行、施設・設備の点検・共有化と整備・改修
⑦ 学校経営	企画調整会議を基盤に据え、経営課題の解決と経営方針の徹底を図ることで迅速かつ組織的な対応力を高めた。また、各分掌はPDCAサイクル表を作成して、学校経営計画の実現を図るための進行管理に活用した。
	一方施設では、農業実習設備が老朽化していることから計画的な更新が必要である。予算執行においては、農業教育の特性もあり、支援センター執行率を高めることには難航している。また、本校校友会の御支援のもと演台2台を追加し、発表会等で活用できるよう整備を図った。

	(ウ) 現行教育課程の評価の在り方		
	現行の教育課程実施に伴い、評価の在り方に関する課題を挙げて検討した。		
	(エ) 計画・継続的研修、教職員のコンプライアンス意識の醸成、組織的点検の実施		
	月初めのクリーンデスクに努め、保有個人情報の管理徹底を図った。そのために、机の施錠と使用する施設などの施錠を徹底した。また、個人情報を含む資料については、各担当者に確認を行ったうえで書類などを手渡した。一部の課題は管理方法を改善した。		
	入学者選抜業務については、採点基準を明確に定め、採点においては複数による複数回の点検を順守した。また、中部学校経営支援センター支所と緊密に連携に行い、情報を共有化して学校経営の適正化と効率化を推進し、経営基盤を強化した。服務事故0を目指し、研修を2回実施するとともに教職員一人一人は意識向上に努めた。		
⑧ 地 域 貢 献 活 動	(ア) 地域貢献の充実		
	農業に関する内容を通じて、地域小学校、地域中学校、井草中学校区地域教育連絡協議会等と連携した貢献活動を実施した。		
	①杉並マルシェ、②J R阿佐ヶ谷駅前花壇作り、③都民広場の都庁花壇実習、④有楽町交通会館マルシェ、⑤中学校出前授業、⑥すぎの子収穫祭、⑦杉並区立三谷小学校長依頼「2年生授業『わたしの町はっけん』訪問」		
	(イ) コンクール等への取組		
	教科に関連した各種競技会やコンクール等への参加を推進し、達成感・成就感を与え学習意欲を高めさせた。		
	①東京都産業教育振興会作文コンクール	佳作	1名
	②日本学校農業クラブ連盟		
	☑東京都予選	・プロジェクト発表「分野Ⅰ類」	優秀賞 4名
		・意見発表	各分野1名ずつ参加（園芸科学科2名・食品科学科1名）
		・家畜審査競技会	参加 4名
		・平板測量競技会	参加 4名
	☑全国大会	・農業鑑定競技会	優秀賞 分野「野菜」園芸科学科 1名
			優秀賞 分野「造園」緑地環境科 1名
			優秀賞 分野「食品」食品科学科 1名
	③日本農業技術検定表彰団体		優秀団体2・3級
	④伊豆の国パン祖のパン祭「第19回全国高校生パンコンテスト」（製菓製パン研究部員）新人賞		
	⑤デザイン甲子園2025（オーセブンCADコンテスト2025）優秀賞		1名

(2)数値目標と結果				
①過去2年間の数値結果				
項目		目標内容	令和5年度	令和6年度
学習活動	ア	生徒の授業満足度（75%以上）	82.6%	95%
	イ	原級留置者 各学年（0.2%以下）	1.0%	1.04%
	ウ	各種資格・検定合格者（生徒数以上）	291件	258件
生活指導	エ	クラス1日当たりの遅刻者数減少（1.0人未満）	1.88人	2.0人
	オ	中途退学率の低減維持（0.0%以下）	1.0%	3.27%
進路指導	カ	第一志望決定率（80%以上）	86%	92%
	キ	卒業時進路決定率（95%以上）	95%	93%
	ク	就職決定率（100%）	96%	80%
	ケ	進学者に占める四大・短大割合（40%以上）	59%	55%
	コ	農業及びその関連企業への進路 進学50%以上、就職75%以上	進学59.3% 就職79.0%	進学66.7% 就職62.5%
募集活動	サ	中学校訪問、塾訪問等（一人3校以上）	88校	137校
	シ	説明会、体験入学、個別相談（13回）中学校への講師派遣（15回）	13回 18回	13回 18回
	ス	ホームページ・X（旧Twitter）／更新回数（100回）	174回 120回	187回
	セ	各学科の第一次募集最終応募倍率（1.2倍以上）	1.03倍	1.03倍

②入学者選抜応募状況						
応募状況	学科	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
最終応募状況 （倍率）	園芸科学科	1.08	1.12	0.96	1.35	1.17
	食品科学科	0.96	1.00	0.93	1.17	1.02
	緑地環境科	1.12	1.00	0.70	0.91	0.91
最終倍率		1.03	1.03	0.88	1.15	1.03

③進路状況

区 分		令和2年度			令和3年度			令和4年度			令和5年度			令和6年度		
		男子	女子	計	男子	男子	女子	計	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
進学	大 学	14	15	29	25	21	46	28	20	48	25	21	25	21	29	50
	短 大	2	4	6		5	5		3	3		5		0	2	2
	専門学校	16	39	55	14	18	32	19	17	36	14	18	14	22	17	39
	大学校	3	1	4	2		2	3		3	2		2	3	1	4
	その他			0			0			0						0
就職	学校幹旋	10	16	26	15	7	22	11	10	21	15	7	15	7	4	11
	縁 故	4	1	5	2		2	4	3	7	2		2	2	1	3
	公務員	1		1	3		3	1	2	3	3		3	2	0	2
	自営・家事			0		1	1	1		1		1				0
	アルバイト			0		4	4			0	0	2	2	2	1	3
未定	進学準備	1	3	4	2	1	3	5	4	9	4		4	3	1	4
	就職準備		1	1			0	1		1			0	0	1	1
	その他			0			0			0			0	1	1	2
合 計		51	80	131	58	66	124	73	59	132	65	54	119	63	58	121

3 今年度の成果・課題と改善策			
	重点項目	成果と課題	改善策
(1)	感染症対策	【成果】コンデションレポートの活用における健康観察入力の実施。各教室などの換気と手指消毒。 【課題】サーキュレーターと二酸化炭素濃度測定器の活用。	手洗い、手指消毒、換気、サーキュレーターなど、啓発活動の継続。
(2)	生活規律の醸成	【成果】基礎・基本の定着と中途退学者の減少のために、その基盤となるきめ細かな生活指導の充実を図った。また、生活指導部員による、正門見守り指導を通年実施した。 【課題】基本的生活習慣の確立を徹底。通信機器等活用マナーの課題。組織的・段階的な遅刻指導の実施。	①組織的な校内外巡回と正門立ち番の継続。 ②段階的な遅刻指導の実施。 ③組織的な頭髪指導及び装身具確認指導。 ④自転車安全指導の充実（ヘルメット着用）。 ⑤制服等着用指導の徹底。 ⑥全校集会時の事前指導及び事後指導 ⑦チャイム着席と授業時のスマートフォン使用禁止の徹底。（※活用する場合もある）
(3)	基礎学力の向上	【成果】各教科は、教科会や教科主任会議を中心とした基礎学力向上の取組を実施した。 【課題】各教科統一の授業規律指導の徹底。家庭学習の時間確保。	①各教科は、生徒実態調査の分析により、家庭学習時間確保に向けた課題を工夫する。また、学年や分掌での中途退学者の抑止を、今後とも組織的に体制を整え継続して実現する。 ②小テストや宿題を定着させ、評価に加える。
(4)	指定校等の取組	【成果】①学力向上推進校（校内寺子屋） 1学年は各教科と連携を図り、本校専任教諭、外部講師による教科指導を実施した。年間 25 回×2時間の教科指導において、参加人数は延べ30名、対象生徒の87%が参加した。参加した生徒からは学力向上を実感し、来年も参加したいという肯定的な意見が多く寄せられた。 ②専門高校における民間OB等活用事業は、進路指導部が中心となり運営した。面接指導、放課後の化学の補習、ベネッセ実力診断テストの事後指導などである。 【課題】校内寺子屋では、事前・事後指導の工夫改善。予算面の管理。指定校への申請。また、民間OB等活用事業の予算計画と管理。	①校内寺子屋では、基礎力診断テストを参考にするとともに、国語・数学・英語の教科担当との教科会をもち、学力向上に向けた情報共有と校内体制の構築を図る。 ②校内寺子屋対象者の生徒の学力結果について、進路指導部が中心となり分析に努める。 ③寺子屋事業で外部人材を活用することにより成果が得られたが、外部人材の活用が不可能な場合、どのようにこの環境を継続させるかが課題である。そのため、校内組織を整えて、生徒の基礎学力向上のために取り組める体制をとることを検討中である。 ④スタディサプリ到達度テストとスタディサプリを活用し、弱点の補強と発展のための勉強法をレクチャーできる人材の発掘。
(5)	進路指導の充実	【成果】3年間を見通した進路指導のロードマップに基づき、計画的な進路指導に取り組むことができた。また、指	①前倒しの面接指導（5月から実施）、小論文指導（国語科との連携）。 ②月間進路だよりの発行（HPへの掲載）。

		定校の取組では、計画的な生徒指導ができた。卒業生の活躍状況を学校HPへ掲載することができた。 【課題】 出口指導の強化が必要である。計画的な面接指導の在り方を検討。キャリア教育に向けた情報の一元化の集約を完成させる必要がある。（各科の資格指導実施及び取得状況、インターンシップ状況など）。	③キャリア教育に向けた情報の一元化集約（各科の資格指導実施及び取得状況、インターンシップ状況等）。 ④学力向上「寺子屋等」の対応と分析。 ⑤母校訪問の調整と生徒指導対応。 ⑥進路指導部員による全学年会への参加（HR年間指導計画の運営連携）。 ⑦推薦を活用する生徒の指導と保護者理解。
(6)	防災教育の充実	【成果】 避難訓練を4回実施し、避難経路の確認ができた。上級救命講習を受講させることができた。 【課題】 自然災害への危機意識の醸成に向けた訓練の在り方について工夫する。避難訓練では、地域（消防団・町会）、消防署、自衛隊と連携した訓練を検討する必要がある。	①防災教育のさらなる充実を図り、地域連携の強化と避難所を想定した生徒主体の訓練を行うなど、地域の特性を生かした本校独自の取組を実践する。 ②2学年は、上級救命講習を受講する。そのために、事前指導を意図的・計画的に実施する。
(7)	安心できる安全な学校	【成果】 職員の朝会にて生徒の情報共有を継続した。5月に全生徒に対して、いじめに関する講話を行った。毎週、学年生活連絡会を実施した。教職員は、体罰の根絶を目指した研修会等を各学期実施した。 【課題】 情報共有と連携。未然防止教育。	①企画調整会議、朝会等を活用し、積極的な情報共有を継続する。各学期に体罰の根絶を目指した研修会等を実施する。 ②いじめ防止対策委員会を機能させ、いじめアンケートや教育相談委員会への生徒情報を基に、いじめのない学校づくりを推進する。
(8)	専門分野の知識技術等向上	【成果】 身に付けるべき専門分野に関する技術・技能内容をさらに明確にし、組織的な取組を継続している。農業技術検定2級5名、3級135名が合格。 【課題】 各種検定に向けた知識技術の向上。	①授業では、生徒が技術・技能面での到達度について確認する。到達していない場合は、繰り返し指導する。 ②次年度も「資格検定」を推奨する。
(9)	部活動加入率の向上	【成果】 部活動加入率を向上させるために、5月に生活指導部による一斉部活紹介を実施した。部活動掲示板を生徒昇降口付近に新設した。X、ホームページ、Instagramなどからの情報発信に努めた。 【課題】 部活動加入継続と加入率向上、部活動の情報発信。決められた活動日及び活動時間の徹底。感染症対策。	①1年のオリエンテーションにて、PTA広報を配布して部活動紹介を行う。4月に生活指導部による一斉部活紹介を実施する。 ②部活動掲示板を継続的に更新する。 ③生徒掲示板の活用とホームページ、X、Teamsなどからの情報発信に努める。 ④手指消毒などの継続。 ⑤部室等の整理整頓。
(10)	特別支援教育の充実	【成果】 各学期に特別支援教育推進検討委員会にて生徒の情報共有を図った。 【課題】 教員校内研修と中学校との連携。特別支援教育推進だよりの発行。	①各教科からの情報共有と年度当初に得た情報を集約し、全教員で共有する。 ②必要に応じて「学校生活支援シート」を作成し生徒指導に役立てる。 ③「特別支援教育推進だよりの発行を継続させ、情報発進に努める。
(11)	人材育成	【成果】 若手教員校内OJT計画を継続し、授業改善等についての研究会を実施した。 【課題】 実施時期の工夫。学校の諸課題をテーマに主幹教諭及び主任教諭を中心としたグループによる人材育成。	①OJTの実施体制については、これまでの反省をもとに、今後も実践的かつ実効的な内容に改善し、教職員が一丸となって目標達成に向けて取り組む姿勢を継続する。 ②教員相互の授業参観の実施。アクティブラーニングの視点をもった授業の展開。
(12)	募集活動の活性化	【成果】 全教職員体制での募集活動は、学校見学会（3回）、体験入学（2回）、学校説明会（2回）、個別相談会（4回）、中学校訪問（137校）などを実施した。募集行事実施時期を考え6月から行った。前年度より募集倍率が微増した。 【課題】 Xの投稿回数を上げ、HPの改善を行う。	①中学校訪問時期の改善と訪問数の設定を行い実施する（教職員一人3校以上とする）。各科の説明を丁寧に行う。 ②個々の活動をホームページに掲載して情報発信に努める。 ③学科ごとに3回以上の出前授業や体験入学を実施する。 ④受検生の進路決定に影響を与える学習塾に対して、訪問や情報提供を行う。